

Title	『山谷詩集注』を読む：小説とその周辺
Sub Title	Reading Shangu Shiji Zhu (山谷詩集注, an annotated edition of Shangu's anthology of poems) : stories and related topics
Author	村越, 貴代美(Murakoshi, Kiyomi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション (Keio University Hiyoshi review. Language, culture and communication). No.52 (2020.) ,p.111- 144
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20201231-0111

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『山谷詩集注』を読む ——小説とその周辺——

村越 貴代美

『山谷詩集注』二十巻は、宋の黄庭堅撰、任淵注。黄庭堅（1045～1105、字は魯直、号は山谷道人）の詩およそ七百首について、黄庭堅晩年の弟子である任淵（1090?～1164）が注をつけ、繫年したもの。

本誌前号¹⁾で、任淵の注によく引かれている文献に注目し、それが作品にどのような表現となって現れるのか、という視点から黄庭堅の詩（山谷詩）を読む試みを、本草文献を中心に起こした。今回は同じ視点に立ちながら、「小説」を取り上げてみたい。ここでいう「小説」は、『漢書』『芸文志』に「小説家者流」と分類された文献に由来するもので、英語の novel に相当するものではない。

『漢書』『芸文志』では諸子百家を十家、すなわち儒家・道家・陰陽家・法家・名家・墨家・縦横家・雑家・農家・小説家に分類し、小説家について、

小説家者流，盖出於稗官。街談巷語，道聽途說者之所造也。

小説家の流れは、稗官（民間の風聞を集めて王に奏上した下級役人）から出たものであろう。町のうわさ話や道ばたで語られたものから、作られた。

とした。その上で、

諸子十家其可觀者九家而已。

諸子十家のうち、見るべきものは九家だけである。

と小説家を退けた。しかし「街談巷語，道聽途說」は、魏晋南北朝時代には人物の逸話や事件の断片を集めた志人小説や、鬼神や怪異を記した志怪小説、唐代には物語性の豊かな伝奇小説へと発展し、北宋の時代には『太平広記』五百巻の編纂に至る。

『太平広記』は、北宋の太宗（在位 976～997 年）の勅命で編纂された小説集。太平興国二年（977）三月、李昉ら十三人が勅命を奉じ、翌太平興国三年（978）八月に完成した。李昉らは同時に百科全書『太平御覽』の編纂も命じられ、こちらは太平興国八年（984）十二月に完

1) 『『山谷詩集注』を読む——本草とその周辺』、慶應義塾大学日吉紀要『言語・文化・コミュニケーション』51号、2019年、39～69頁。

成している。ほかに当時の出版事業として、詩文集『文苑英華』（987年成立）と史料集『冊府元龜』（1013年成立）の編纂があり、『太平広記』『太平御覧』とあわせて「宋四大書」と称される。いずれも「類書」と呼ばれる形態で、複数の書物から集めた記事をテーマによって分類配列し、百科事典のような参考図書の役割を果たす。

黄庭堅は学問を重んじ、その山谷詩は「一語一語すべて来歴がある」と評される。気に入った典故は繰り返し使う傾向もあり、『莊子』徐無鬼篇の「匠石運斤」は計十九例、唐代伝奇小説「枕中記」は計十三例あるという²⁾。『莊子』は諸子の「道家」に分類される書物であり、先秦の著作であって、「匠石運斤」を典故とする詩句は唐代までの詩にも多い。一方の「枕中記」は唐代伝奇小説であるから、これを典故とする詩句は、唐代以前には出てこないはずである。「枕中記」を典故とする「黍一炊」「百年一炊」「熟黄粱」などは、宋代以降の新しい詩語であり、山谷詩に多用されたことで定着していった可能性がある。

こうした典故がどのような文献や書物に拠るのか、それは単行で流布していたものなのか、「類書」などに収録されていたものなのか、この点については以前考察した³⁾。「枕中記」については、

一般的な宋代士人は、流通の少ない『文苑英華』や『太平広記』によって「枕中記」に接したとは考えにくく、蘇軾・黄庭堅・陳師道などの詩集の宋人注からみて、大部分は単行していた『異聞集』により「枕中記」を知ったものと思われる。

とされる⁴⁾が、任淵注には『異聞集』だけでなく『広記』も、書名として見える。

黄庭堅が具体的にどのような文献や書物から字句や発想を得ていたのか、任淵の注を整理していると、「小説」の類も多いことに気づかされる。黄庭堅自身は『太平広記』のような「類書」、すなわちテーマごとにすでに分類整理されている参考図書からではなく、『異聞集』のような単行の書物の山から、日々の読書によって学殖を豊かにし、典故として詩句を制作していたのかも知れないが、どのような「小説」からどのような字句や発想が生まれたのであろうか。

一、『太平広記』の受容

「宋四大書」の中で、『太平広記』の成立がもっとも早い。ただし、『太平御覧』『文苑英華』『冊府元龜』がそれぞれ一千巻だったのに対し、『太平広記』は五百巻。版木が準備されたあと、「学者の急とする所に非ず」（王応麟『玉海』巻五四「太平広記」条所引『宋会要』）（興国）六

2) 莫礪鋒『江西詩派研究』、齊魯書社、1986年、54頁。

3) 拙論「『山谷詩集注』を読むために(3)」、慶應義塾大学日吉紀要『言語・文化・コミュニケーション』50号、2018年、81～109頁。

4) 岡本不二明「宋詩にみえる「枕中記」の影響について」、『岡山大学文学部紀要』58号、2012年、27～41頁。

年詔令鏤板」注)とされてすぐには印刷されず、明代になるまで刊本での流通はかなり限られていたというが、蘇軾や門下の黃庭堅らは『太平広記』を読んでいた形跡がある。

富永一登「『太平広記』の諸本について」⁵⁾によれば、蘇軾の「書鬼仙詩」八首は、元祐三年(1088)二月二十一日夜、蘇軾が黃庭堅らと李公麟の書齋に集まって、幽霊や神仙の詩一巻を編んだもので、跋文に、

太平広記中、有人為鬼物所引入墟墓，皆華屋洞戸。忽為劫墓者所驚，出，遂失所見。但云，
芫花半落，松風晚清。吾每愛此兩句，故附之書末。

『太平広記』に、ある人が鬼(幽霊)に導かれて墓に入ったが、そこは立派な屋敷のようだった。ふと墓をあばこうとする者がいて、外に出てみると、もう何も見えなくなっていた。ただ「芫花 半ば落ち、松風 晩に清し」の句が残った、という。私はこの二句がとても好きなので、ここに巻末に記す。

と、『太平広記』卷三三九(鬼二四)「崔書生」から詩句を引用している⁶⁾。また富永一登氏は、蘇軾の「峽山寺」詩に、

佳人劍翁孫， 佳人は劍翁の孫，
遊戯暫人間。 遊戯して暫く人間にあり。
忽憶嘯雲侶， 忽ち憶う 嘯雲の侶，
賦詩留玉環。 詩を賦して玉環を留む。

とあるのは「唐・裴鋼『伝奇』所収の袁氏(猿の化した女性)と孫恪の恋物語を詠み込んだものであり、ほかにも「『搜神記』『搜神後記』『漢武内伝』『続齊諧記』『枕中記』『南柯太守伝』『長恨歌伝』『鶯鶯伝』などかなりの六朝唐代の小説を読んでいたことが知られている」⁷⁾という。さらに、「蘇軾の師歐陽脩も『新唐書』芸文志で小説家の内容を一変させたことをはじめ、小説を相当数読んでいたという」⁸⁾と指摘している。

西尾和子『太平広記研究』⁹⁾では、蘇軾の「書鬼仙詩」跋文について富永一登氏の論考を踏まえた上で、

元祐三年は、蘇軾が中央に戻っていた時期である。李公麟の家に集まった二月二十一日は、蘇軾が李公麟を召して考校官につかせた日でもある。大方その折りに集ったのであろう。こうした私的な文人同士の集まりで、鬼仙について録し、巻末に『広記』より引用した句を載せていることから、詩作の参考のために、特に珍しい話や不思議な話の拠りどころと

5) 富永一登「『太平広記』の諸本について」、『広島大学文学部紀要』59巻、1999年、42～61頁。

6) 富永一登「『太平広記』の諸本について」、43～44頁。

7) 富永一登「『太平広記』の諸本について」、45頁。この部分について注(12)に、船津富彦「蘇東坡の小説観」(『東洋文学研究』九、1961年)参照、とある。

8) 富永一登「『太平広記』の諸本について」、45頁。

9) 西尾和子『太平広記研究』、汲古書院、2017年。引用は、49頁。

して『広記』を用いることは、中心となった蘇軾をはじめ蘇軾周辺のグループ内では、共通の認識であったらうと考えられる。

と述べている。

富永氏も西尾氏も『太平広記』の刻本に主な関心があり、北宋の文人が刻本『太平広記』を読んでいたことの証左として、蘇軾の「書鬼仙詩」跋文や、そのほかの蘇軾や北宋の文人が『太平広記』を読んでいた記事を挙げている。『太平広記』五百巻は「学者の急とする所に非ず」とされて版本は準備されたものの印刷刊行が遅れた、と『玉海』にあるからであるが、蘇軾とその周辺の文人についていえば、必ずしも刻本（しかも官刻の）で『太平広記』を読む必要はなく、宮中書庫で抄本『太平広記』、あるいは『太平広記』編纂のために使われた書物を、自由に読める立場にあった。西尾氏が、

（蘇軾は）記憶違いの例があることから、手元で『広記』を読みながら詩文を書いたわけではないようである。おそらく、蘇軾は、中央に居た頃に『広記』を読んだものと思われる。

と想定する¹⁰⁾のは、正しいと思われる。ただし、中央に居た頃に宮中書庫で『太平広記』を読んでいた可能性があり、南宋の文人が『太平広記』の刻本（坊刻本を含めて）を自ら所蔵して読むのとは、状況が異なったのではなかろうか。

元祐三年（1088）というと、黄庭堅は四十四歳、秘書省兼史局。正月十七日から三月一日まで、蘇軾・孫覺・孔文舉らが知貢挙、黄庭堅・李公麟らが試験官を務めた。秦觀・張耒・晁補之らも館職にあり、「蘇門四学士」の名が広まった。この時期、黄庭堅には「觀伯時画馬礼部試院作」「題伯時画觀瘞虎」「題伯時画觀魚僧」「題伯時画頓塵馬」「題伯時画巖子陵釣灘」「題伯時画松下淵明」の詩があり、李公麟の描いた画に黄庭堅らが詩を題することを、よく集まっては行っていたのであろう。そうした折りに、『太平広記』に載せられるような「珍しい話や不思議な話」も多いに語られたに違いない。

こうした文人の活動は、「志怪」が発達した魏晋の時代にもあった。貴族や有力者を中心とした文人のグループやサロンで、詩文を披露しあったり、人物批評をしたり、学問的議論をたたかわせたりする、そうした場で超自然的な説話やエピソードが語られ、記録されて紹介される。内容は多岐にわたり、成立した書物には、さまざまな話を網羅した『搜神記』『搜神後記』『幽明録』、山川地理に関する『博物志』『述異記』、仙術に関する『神仙伝』、仏教に関する『宣驗記』、女性の嫉妬心に関する『妬記』などがあった¹¹⁾。

魏晋南北朝時代のこうした書物は、『隋書』『経籍志』では史部雜伝類に分類され、『旧唐書』『経籍志』でも踏襲して史部雜伝類に分類された。『旧唐書』『経籍志』の子部小説家類には『嚮

10) 西尾和子『太平廣記研究』、50頁。

11) 前野直彬『中国文学史』、東京大学出版会、1975年、第三章「隋・唐・南北朝」の「志怪の流行」、参照。

子』『燕丹子』『笑林』『博物志』『郭子』『世説』『続世説』『小説（劉義慶撰）』『小説（殷芸撰）』『釈俗語』『弁林』『酒孝経』『座右方』『啓顔録』が著録されるのみだった。欧陽脩は『新唐書』『芸文志』でこれを改め、魏晋南北朝時代の「志怪」を史部雜伝類から子部小説家類に移し、子部小説家類の書物が大幅に増えた。欧陽脩が「『新唐書』芸文志で小説家の内容を一変させた」とは、このことを指す。ここに至って「志怪」は「志怪小説」となった、と言っていいかも知れない。

欧陽脩が「経籍志」を「芸文志」に改めたのは『漢書』『芸文志』に倣ったのであり、『漢書』『芸文志』では小説家を「盖し稗官より出づ」としていた。稗官がなぜ「街談巷語、道聴途説」を集めるのかといえば、為政者に民情を伝えるためである。その意味で、小説を読んで詩文に反映させることは、古代の小説の役割に回帰したとも言えるのである。

『旧唐書』は五代後晋の劉昫らの編、開運二年（945）に完成したがその翌年には後晋が滅んでしまい、編纂責任者が途中で交代するなど混乱もあり、初唐に情報量が偏っていると評される。欧陽脩の『新唐書』は嘉祐六年（1060）、『太平広記』編纂より後の成立であり、『旧唐書』『経籍志』には見えない唐末の『異聞集』なども著録されている。たとえば牛僧孺の『玄怪録』も、『旧唐書』『経籍志』には見えないが『新唐書』『芸文志』には見える。

『玄怪録』は伝奇小説集として子部小説家類に分類されるが、唐代の伝奇小説は詩文集の中に収められているものもあり、その場合は集部別集類に分類される。柳宗元などがそれに当たる。唐代の伝奇は「個人の創意によって構成された虚構のなかに、作者の人生観、あるいは世界観が展開されるという点で、素朴な記録性を特徴とする六朝志怪とは大きく異なる。伝奇は、物語であり、ロマンであり、今日われわれが普通に言う〈小説〉のイメージにきわめて近いジャンルとしてその華を咲かせた」¹²⁾と評されるが、詩文集に伝奇が収録されるのは、「街談巷語、道聴途説」ではなく作者による創作であるとの認識の現れであろう。

本稿で対象とするのは、作者の創意による物語ではなく、子部小説類に分類される「街談巷語、道聴途説」である。

まず『太平広記』について検討すると、『山谷詩集注』の任淵注に、『太平広記』は六カ所に見える。（以下、『山谷詩集注』の詩には整理番号を付す。たとえば0101は、巻一の第一首のこと）

① 0120「次韻呉宣義三徑懷友」,「佳眠未知曉」の任淵注に,「広記、鄭郊謁友人於陳蔡,路逢一冢,有竹兩竿。鄭為詩曰,冢上兩竿竹,風吹常裊裊。冢中賡之曰,下有百年人,長眠不知曉」とある。

② 0619「以团茶洮州緑石研贈無咎文潜」,「貝宮胎寒弄明月」の「弄明月」,任淵注に「太

12) 前野直彬『中国文学史』, 118~119頁。

平広記鬼詩，還山弄明月」とある。

③ 1103「記夢」，「靈君色莊妓揺手」の任淵注に，「李靖謁越国公楊素，有妓執紅扠立於前，是夕，妓遂奔靖。靖將婦太原，行次靈石旅舎。妓方理髮，髮長委地。有蚪鬚客乘驢而來，投革囊於前，取枕欹臥，看妓理髮。靖方刷馬，怒甚，未決。妓熟觀其面，一手握髮，一手映身揺示靖，令勿怒。急梳頭，拜客，以兄呼之。見太平広記，此借用」とある。

④ 1106「以梅餽晁深道戲贈二首」其二，「前身鄴下劉公幹」の任淵注に，「梁顧惣始為県吏，一夕遇二人，称是王粲・徐幹，云，昔与公同府。公，劉楨也。仍誦其遺文。惣悟，以遺文數篇投令，令待之甚厚。時謂死劉楨猶庇得生顧惣。見太平広記」とある。

⑤ 1806「鄂州南樓書事四首」其一，「清風明月無人管」の「清風明月」，任淵注に「又太平広記鬼詩，明月清風良宵会同」とある。

⑥ 1924「花光仲仁出秦蘇詩卷思両国士不可復見開卷絶歎因花光為我作梅数枝及画煙外遠山追少游韻記卷末」，「長眠橘洲風雨寒」の「長眠」，任淵注に「太平広記載冢中人対鄭生詩云，長眠不知曉」とある。

②の「太平広記鬼詩」は，蘇軾の「書鬼仙詩」八首のうちの「酒尽君莫沽，壺傾我当発。城市多囂塵，還山弄明月」のこと。ところが『太平広記』にこの詩句は見当たらない。0502「次韻子瞻武昌西山」の「鸚鵡洲前弄明月」の任淵注には「小説載鬼詩曰，城市多囂塵，還山弄明月」とあり，この「小説」とは何か調べていくと，南宋・王十朋（1112～1171）の『東坡詩集注』卷四「虔州八境図八首」¹³⁾ 其八の「誰向空山弄明月，山中木客解吟詩」の注に，

徐鉉小説載鄱陽山中有木客，自言秦時造阿房宮採木者也。食木実，遂得不死。時就民間酤酒酣飲，為詩一章云，酒尽君莫酤，壺傾我当発，城市多囂塵，還山弄明月。

徐鉉の小説に，次の話が載せられている。鄱陽の山中に木客（深山に棲む伝説中の精霊）がいて，自ら言うには，秦の時代に阿房宮を造営する際に木を採った者である。木の実を食べて，不死を得た。当時，民のところで酒を買って痛飲し，詩一章を作った，「酒尽くるも 君 酤うこと莫れ，壺傾けば 我 当に発すべし。城市 囂塵多し，山に還りて明月を弄ばん」と。

とある。また南宋・施元之（生卒年不詳，紹興二十四年＝1154年の進士）の『施註蘇詩』卷一三「虔州八境図八首」の当該詩句の注に「徐鉉帖」として同じ記事を引く。

徐鉉（916～991）は，五代南唐から宋朝に仕え，学者としては『説文解字』を校訂した大徐本で有名だが，『太平広記』の編纂に携わったうちの一人。『稽神録』（子部小説家類）を残している。書家としても名高い。『稽神録』にも現行本ではこの鬼詩は見当たらず，逸文かも知れない。

13) 蘇軾「虔州八境図八首」は，元豊元年（1078），密州（山東省）に知事として赴任していた時の作。

0502「次韻子瞻武昌西山」の詩題の任淵注には、

東坡集此詩序云、元祐元年十一月二十九日、与翰林承旨鄧聖求会宿玉堂、偶話旧事。聖求嘗作元次山窪樽銘、刻之巖石。因為此詩、請聖求同賦。

東坡集のこの詩の序に、「元祐元年十一月二十九日、翰林の承旨の鄧聖求（鄧潤甫）と玉堂で会宿し、思い出を語った。聖求はかつて元次山（元結）の窪樽（岩の凹んだのをこう呼んだ）に銘を作り、これを岩石に刻した。そこでこの詩を作り、聖求に頼んで（聖求の銘文に）あわせて賦す（銘文のそばに刻ませる）」とある。

とあり、黄庭堅は蘇軾の詩に次韻したのである。蘇軾らが李公麟の家に集って鬼仙詩を一巻にまとめた元祐三年より前、元祐元年にはすでに鬼詩「酒尽君莫沽、壺傾我当癸。城市多囂塵、還山弄明月」を知っていて、黄庭堅は詩に詠み込んだことになるが、任淵注はこの鬼詩の出所を「太平広記」としたり「小説」としたり、揺れている。

任淵注には、ところどころ「○」印が出てくる。『山谷詩集注』は初稿が出来たとする政和元年（1111）から四十年ほど後の紹興二十五年（1155）に刊行されるが、その間、注を見直して手を加えたが、きれいに整理して刊行したのではなく、「○」印のあとに付け加える形で注を増やしていることが多い。そして『太平広記』に関しては、②以外の五カ所は、いずれも「○」印のあとに引用されている。任淵にとって『太平広記』は、北宋末の政和年間には利用しづらい文献で、南宋になってから利用しやすくなった、と見てよいと思う。

①の記事は、『太平広記』卷三五四「鄭郊」に見える。出『述異記』。

③の記事は、『太平広記』卷一九三「虬髯客」に見える。出「虬髯伝」。

④の記事は、『太平広記』卷三二七「顧恣」に見える。出『玄怪録』。

⑤の記事は、『太平広記』卷三二九「劉諷」に見える。出『玄怪録』。

⑥の記事は、①と同じ。

黄庭堅自身は、『太平広記』はもとより、『太平広記』編纂のもととなった『述異記』や『玄怪録』を読んでいた可能性は、もちろんある。また②の例で言えば、徐鉉の「小説」で鬼詩を知り、のちに蘇軾らとの会合で議論した、ということになる。

二、一般的な典故と詩語——『莊子』「匠石運斤」と「枕中記」を例に

黄庭堅がとくに好んで用いたという『莊子』「匠石運斤」と「枕中記」を例に、一般的に典故がどのように詩に詠み込まれて詩語となるのか、見ておきたい。任淵の注は、詩題や詩句に適宜割って入る形で加えられている。作品ごとに○数字で通し番号を付す。

0117 留王郎 世弼①

王郎を留む 世弼

- | | |
|-----------|-------------------|
| 1 河外吹沙塵 | 河外 沙塵吹き |
| 2 江南水無津② | 江南 水に津無し |
| 3 骨肉常万里 | 骨肉 常に万里 |
| 4 寄声何由頻③ | 声を寄すること何に由りてか頻りなる |
| 5 我随簡書来 | 我 簡書に随って来たり |
| 6 顧影将一身④ | 影を顧みるも一身を将いるのみ |
| 7 留我左右手 | 我が左右の手を留め |
| 8 奉承白頭親⑤ | 白頭の親に奉承せしむ |
| 9 小邦王事略 | 小邦 王事略にして |
| 10 虫鳥声無人⑥ | 虫鳥 声に人無し |
| 11 王甥解鞍馬 | 王甥 鞍馬を解き |
| 12 夜語鷄喚晨⑦ | 夜語りて 鷄晨を喚ぶ |
| 13 母慈家人肥 | 母は慈しみて家人肥え |
| 14 女恵男垂紳⑧ | 女は恵くして男は紳を垂る |
| 15 有田為酒事 | 田有りて 酒事を為し |
| 16 豚韭及秋春⑨ | 豚韭 秋春に及ぶ |
| 17 生涯得如此 | 生涯 此くの如きを得ば |
| 18 旧学更光新⑩ | 旧学 更に光新たなり |
| 19 索去何草草 | 去らんことを求めて何ぞ草草たる |
| 20 小留慰艱勤⑪ | 小らく留まりて艱勤を慰めよ |
| 21 百年才一炊 | 百年 才かに一炊 |
| 22 六籍経幾秦⑫ | 六籍 幾秦かを経たる |
| 23 要知胸中有 | 知るを要む 胸中の |
| 24 不与迹同陳⑬ | 迹と同一に陳びざる有るを |
| 25 郢人懐妙質 | 郢人 妙質を懐く |
| 26 聊欲運吾斤⑭ | 聊か吾が斤を運らさんと欲す |

【任淵注】

- ①王純亮，字世弼，山谷之妹婿。見於黃氏世譜¹⁴⁾。
 ②言南北相望之遠。文選謝靈運詩¹⁵⁾，河洲多沙塵，風悲黃雲起。書¹⁶⁾曰，若涉大水，其無津涯。

14) 『黃氏世譜』は、1526「謝答聞善二兄九絶句」の詩題注にも見える。逸書か。未見。

15) 『文選註』卷三〇，謝靈運「擬魏太子鄴中集詩八首并序」。

16) 『書』「微子篇」，『尚書注疏』卷九。

- ③角弓詩序¹⁷⁾曰、骨肉相怨。漢書趙廣漢傳¹⁸⁾曰、界上亭長寄聲謝我。
- ④詩¹⁹⁾曰、畏此簡書。曹子建責躬表²⁰⁾曰、形影相弔、五情愧赧。資治通鑑²¹⁾、晉李密言、吾獨立於世、顧影無儔。退之詩²²⁾、念汝將一身、西來曾幾年。○何晏行步顧影。見魏志²³⁾。
- ⑤晉書邵統傳²⁴⁾、統諫成都王穎討長沙王乂、曰、兄弟如左右手。
- ⑥小邦謂德安鎮。詩²⁵⁾曰、王事靡盬。謝靈運詩²⁶⁾曰、虛館絕諍訟、空庭來鳥雀。退之琴操²⁷⁾曰、四無人聲。
- ⑦爾雅²⁸⁾曰、姊妹之子為甥。
- ⑧禮記禮運²⁹⁾曰、父子篤、兄弟睦、夫婦和、家之肥也。王介甫作鄆女墓誌³⁰⁾曰、吾女生惠異甚。按惠與慧同。禮記玉藻³¹⁾曰、童子之節也、緇布衣、錦緣、錦紳。又³²⁾曰、紳垂足。
- ⑨酒事謂麴蘖事³³⁾、見下茗事注。禮記王制³⁴⁾曰、庶人春薦韭、秋薦黍、韭以卵、黍以豚。
- ⑩莊子³⁵⁾曰、吾生也有涯。易³⁶⁾曰、君子以篤實輝光、日新其德。
- ⑪老杜詩³⁷⁾、問君適萬里、取別何草草。
- ⑫百年一炊用邯鄲夢事、見上注³⁸⁾。選東京賦注³⁹⁾曰、蓋六籍所不能談。李善注引封禪書曰、

17) 『詩經』小雅「角弓」序、『毛氏注疏』卷二二。

18) 『漢書』卷七六「趙廣漢傳」。

19) 『詩』小雅「出車」、『毛氏注疏』卷一六。

20) 曹植「上責躬詔詩表」、『文選註』卷二〇。

21) 『資治通鑑』卷七九「晉紀・世祖武皇帝上之上」、泰始三年。

22) 韓愈「示爽」、『五百家注昌黎文集』卷六。

23) 『三国志・魏志』に見えない。『世說新語』下卷「容止第十四」2、「何平叔美姿儀、面至白、魏明帝疑其佗粉」の注に、「魏略曰、晏性自喜、動靜粉帛不去手、行步顧影」とある。

24) 『晋書』卷六三「邵統傳」。

25) 『詩』唐風「鶉羽」、『毛氏注疏』卷一〇。

26) 『文選註』卷三〇、謝靈運「齋中讀書」。

27) 韓愈「琴操十首」其七「履霜操」、『五百家注昌黎文集』卷一。

28) 『爾雅』積親「母党」、『爾雅注疏』卷三。

29) 『礼記』「礼運」、『礼記注疏』卷二二。

30) 王安石「鄆女墓誌」、『臨川文集』卷一。

31) 『礼記』「玉藻」、『礼記注疏』卷三〇。

32) 『礼記』「玉藻」、『礼記注疏』卷三〇。

33) 0612「謝黃從善司業寄惠山泉」の「急呼烹鼎供茗事」の注。

34) 『礼記』「王制」、『礼記注疏』卷一二。

35) 『莊子』「養生主」、『莊子注』卷二。

36) 『易』「大畜」、『周易註』卷三。

37) 杜甫「送張孫九侍御赴武威判官」、『九家集注杜詩』卷四。

38) 0101「古詩二首上蘇子瞻」其二「蓋世成功黍一炊」の注。

39) 『文選註』卷三、張衡「東京賦」。

六経載籍之伝。王介甫虔州学記⁴⁰⁾曰、周道微、不幸而有秦、燒詩書、殺學士。然是心非獨秦也、當孔子時、既有欲毀郷校者矣。介甫又著桃源行⁴¹⁾曰、天下紛紛幾幾秦。

⑬莊子⁴²⁾曰、機心存於胸中。又天運篇⁴³⁾、老子曰、六経、先王之陳迹也、豈其所以迹哉。

⑭莊子⁴⁴⁾曰、莊子過恵子之墓、謂従者曰、郢人堊漫其鼻端、若蠅翼、使匠石斲之。匠石運斤成風、聽而斲之、尽堊而鼻不傷。郢人立不失容。宋元君聞之、召匠石曰、嘗試為我為之。匠石曰、臣則嘗能斲之。雖然、臣之質死久矣、自夫子之死也、吾無以為質矣。

【通釈】

王郎を留める 世弼

ここ黄河の北では砂塵が吹くが、故郷の江南は豊かな水が果てしなく広がっている。肉親はいつも万里のあなたに離れていて、手紙を送りたいが頻繁にはできない。私は命令書によってここに赴任してきたのだが、随っているのは影ばかり。私の左右の手（兄弟）は故郷にとどめて、年老いた親に仕えさせている。小さな町では政務も忙しくなく、虫や鳥の声ばかりで人々の声も聞こえない。王くんは旅の馬から下りられ、夜通し語り合い、鶏が夜明けを告げるときになった。母は慈愛深く、家のものは元気で、娘は賢く、息子は大帯をしめるまでになったとのこと。田があるのでその穀物で酒を造り、先祖のお祭りに当たっては春には韭を、秋には豚をお供えているという。生涯このように過ごしていれば、むかし学んだ学問はいつそう輝きを新たにしよう。君はどうしてそんなに慌てていとまごいをなさるのか。まあもう少し留まって、私の苦勞を慰めてください。人生百年の榮華もわずかに黍一炊の夢。經典でさえ秦の焚書に限らず幾たびも途絶えそうな目に遭ってきた。だが知ってください、胸の中の学問は、書物の跡とともに古びることはない。郢人（王くん）はすばらしい素質をお持ちだから、匠石（私）もいささか斧（詩作の腕）をふるってみたい。

①王純亮、字は世弼、山谷の妹の婿である。『黄氏世譜』にその名が見える。

②南北の相い望んでも遠いことを言っている。『文選』の謝靈運の詩に「河洲 沙塵多し、風悲しく黄雲起こる」とある。『書』に「大水を渉るに、其れ津涯無きが若し」という。

③「角弓」詩の序に「骨肉相い怨む」とある。『漢書』「趙広漢伝」に「界上の亭長、声を寄せて我に謝す」とある。

40) 王安石「虔州学記」、『臨川文集』卷八二。

41) 王安石「桃源行」、『臨川文集』卷四。

42) 『莊子』「天地」、『莊子注』卷五。

43) 『莊子』「天運」、『莊子注』卷五。

44) 『莊子』「徐無鬼」、『莊子注』卷八。

- ④『詩』に「此の簡書（天子の命令書）を畏る」とある。曹子建「責躬表」に「形影相い弔い、五情愧赧す」とある。『資治通鑑』に、晋の李密が「私は独りで世に立っていて、影を顧みただけで仲間はいない」と言ったとある。退之の詩に「汝が一身を將いるを念う、西より来たりて曾て幾年ぞ」とある。○何晏は、出歩くときは自分の影を顧みた（身だしなみが乱れていないか注意した）という。『魏志』（『世説』注引『魏略』）に見える。
- ⑤『晋書』「邵統伝」に「統は成都王穎が長沙王父を討とうとするのを諫めて『（私は）兄弟は左右の手のようなものだと聞いています』と言った」とある。
- ⑥小邦は徳安鎮をいう。『詩』に「王事は鹽^{おろそ}かなること靡^なし」という。謝靈運の詩に「虚館 諍訟絶え、空庭 鳥雀来る」とある。退之の「琴操」に「四もに人声無し」とある。
- ⑦『爾雅』に「姉妹の子を甥と為す」とある。
- ⑧『礼記』「礼運」に「父子篤く、兄弟睦じく、夫婦和なるは、家の肥かなるなり」とある。王介甫が「鄮女墓誌」を作り、「吾が女（むすめ）、生れながらに恵異なること甚し」という。案ずるに、恵は慧と同じ。『礼記』「玉藻」に、「童子の節たるや、緇布の衣、錦の縁、錦の紳あり（成人前のこどもの礼節は、黒色の布で作られた錦の縁のある衣を着て、錦の大帯をつける）」とある。また、「紳は足に垂る（紳という帯は足まで垂らす）」とある。
- ⑨酒事は、麴で仕込むこと、下の「茗事」注を見よ。『礼記』「王制」に「庶人、春は韭を薦め、秋は黍を薦む。韭には卵を以てし、黍には豚を以てす」とある。
- ⑩『莊子』に「吾が生は涯^{かき}り有り」とある。『易』に「君子は篤実輝光を以て、日々其の徳を新たにす」とある。
- ⑪老杜詩⁴⁵⁾、問君適万里、取別何草草。老杜の詩に「君に問う 万里を適くに、別れを取ること何ぞ草草たると」とある。
- ⑫百年一炊は、邯鄲の夢の故事を用いている。上注を見よ。『文選』「東京賦」（班固「東都賦」の誤り）注に「蓋し六籍は談ずる能わざる所なり」という。李善注に「封禪書」を引いて「六経は書物の伝（注解）である」という。王介甫の「虔州学記」に「周の道が衰微したのは不幸であった。秦が詩書を焼き、学者を殺したいわゆる焚書坑儒があった。しかし、このような心性はただ秦だけのものではない。孔子の時にも、すでに郷校を破壊しようという動きがあった」とある。介甫はまた「桃源行」を著し、「天下紛紛として幾秦かを経たる」という。
- ⑬『莊子』に「機心（たくらみの心）、胸中に存す」とある。また「天運篇」に、「老子が『六経は先王の古い足跡である。どうしてそんなものをたどる必要があるだろうか』と言った」とある。
- ⑭『莊子』に、「莊子が恵子の墓を通りかかった時、従者に言った。「郢人（の左官）が白

45) 杜甫「送張孫九侍御赴武威判官」、『九家集注杜詩』卷四。

い壁土を鼻先に塗ったが、蠅の羽ほどの薄さだった。これを匠石（大工の名人）に削らせた。匠石が斤をめぐらすこと風のごとく、さっと切りかかると、壁土はすっかり削り落とされたが鼻はかすり傷ひとつなかった。郢人も立ったまま顔色ひとつ変えない。この話を宋の元君が聞き、匠石を呼んで『私のためにもう一度その芸をやってくれ』と言った。匠石は『私は以前これをうまく削ることができました。しかし、私の腕はもうだいぶ前に絶えました。相棒が死んで、私の腕もふるうことはかなわなくなったのです』と答えた」と。（恵施先生がお亡くなりになってから、私の好敵手になってくれる人がいなくなってしまう、議論の妙を尽くす事ができない）」とある。

『莊子』の「匠石運斤」の故事は、詩の最後の任淵注に詳しい。「王郎（王くん）」とは、若いころ郷里でともに学んだ仲で、妹が嫁ぎ、郷里に残してきた母たちの面倒を篤く見てくれていたらしい。この時、黄庭堅は德州德平鎮（今の山東省商河県德平鎮）に単身で赴任していた。そこは郷里から遠く離れ、水の豊かな江南とは違って砂塵舞う北方の地、仕事もさほど忙しくはなく、話し相手もいない。はるばる訪ねてくれた「王郎（王くん）」に郷里での様子を聞いて安心し、夜通し話しこんだが、まだ足りない。やっと「郢人」のごとき君がやってきたのだから、自分もいささか匠石のごとく久しぶりに詩作の腕をふるいたい、だからもうしばらく居てくれたまえ、という詩である。

「匠石運斤」の故事の、互いに実力を認め合う相手があってこそ能力を発揮できる、分からない相手に実力を披露しても無駄だ、という考え方は詩人の心に響いたようで、詩句にも使われるようになった。たとえば、魏晉・嵇康は「郢人忽已逝、匠石寝不言（郢人 忽として已に逝き、匠石 寝ねて言わず）」（「与阮德如詩」）、「郢人審匠石、鍾子識伯牙（郢人 匠石を審かにし、鍾子 伯牙を識る）」（「五言詩三首」其一）、「郢人逝矣、誰与尽言（郢人逝きて、誰か与に言を尽さん）」（「四言贈兄秀才入軍詩」）と、この故事を好んで詠っている。

「枕中記」のほうは、任淵注⑫に「百年一炊用邯鄲夢事、見上注」とあるので、その詩を読んでみよう。『莊子』と違って唐代の新しい物語で、テキストの問題が生じている。

0104 王稚川既得官都下有所盼未歸予戲作林夫人欸乃歌二章与之竹枝歌⁴⁶⁾ 本出三巴其流在湖湘耳欸乃湖南歌也①

王稚川 既に官を得るも都下に盼する所有りて未だ帰らず 予 戯れに林夫人の欸乃歌二章を作りて之に与う 竹枝歌は本と三巴より出でて其の流れは湖湘に有るのみ 欸乃は湖南の歌なり

46) 「竹枝歌…」以下はもと 0103「次韻王稚川客舍二首」の注であったものが混入したと考えるほうが、通じやすい。竹枝歌は唐の劉禹錫が貞元年間（785～804）、沅湘にいた頃に民歌をまねて作ったのが始まり。三巴は巴郡・巴東・巴西の総称、今の四川省嘉陵江と綦江流域以東の地域。

- 1 花上盈盈人不帰 花上盈盈として 人 帰らず
 2 棗下纂纂実已垂② 棗下纂纂として 実 已に垂る
 3 臘雪在時聽馬嘶 臘雪在りし時 馬の嘶くを聴かん
 4 長安城中花片飛③ 長安城中 花片飛ぶらん

又

- 1 従師学道魚千里 師に従いて道を学ぶこと魚の千里
 2 蓋世成功黍一炊④ 世を蓋^{おほ}って功を成すも黍の一炊
 3 日日倚門人不見 日日門に倚れども 人 見えず
 4 看尽林鳥反哺兒⑤ 看尽くす 林鳥 反哺の兒

【任淵注】

①欵音襖，乃音藹。黄氏⁴⁷⁾ 有山谷手写旧本，題云，余復代稚川之妻林夫人寄稚川，時稚川在都下，有所顧盼，留連未帰也。

②黄氏本前章曰，花上盈盈人不帰，棗下纂纂実已垂。尋師訪道魚千里，蓋世功名黍一炊。按初学記歌門⁴⁸⁾ 載劉敬叔異苑曰，臨川聶包死数年，忽詣南豊，見沈道襲歌笑，每歌輒作花上盈盈正聞行，当帰不聞死復生。文選潘岳笙賦⁴⁹⁾，歌曰，棗下纂纂，朱実離離。宛其死矣，化為枯枝。人生不能行楽，死何以虚謚為。李善注引古咄咄歌曰，棗下何攢攢，榮華各有時。棗欲初赤時，人從四辺來。棗適今日賜，誰能仰視之。什邡張氏有山谷手書此詩，与今本正同，唯一二字稍異，実已垂作実已稀，又有跋云，宋時有鬼女至人家，歌花上盈盈曲，声悲怨，不可聽。潘岳閑居賦中歌曰棗下纂纂云云。所援引小有抵牾，蓋隨所記憶，略举大概耳。

③張氏本作聽嘶馬。老杜詩⁵⁰⁾，一片花飛減却春，風飄万点正愁人。長安蓋借言汴京。

④黄氏本後章曰，臥氷泣竹慰母飢，天呉紫鳳補兒衣。騰雪在時聽嘶馬，長安城中花片飛。四句蓋旧所作，後方改定。今附見於此，庶知前輩有日新之功也。後漢李固伝⁵¹⁾，步行尋師，不遠千里。晋書夏侯湛伝⁵²⁾ 曰，古之人，厥乃千里尋師。漢書項羽伝⁵³⁾ 曰，力拔山兮氣蓋世。莊子⁵⁴⁾ 曰，功蓋天下，而似不自已。張氏本有山谷跋云，魚千里，蓋陶朱公養魚法。凡魚遠行則肥，池中養魚慮其瘦，故於池中聚石作九島，魚繞之，日行千里。黍炊，即淳于棼夢富

47) 彭山（四川省）の黄氏のこと。

48) 『初学記』卷一五。

49) 『文選註』卷一八，潘岳「笙賦」。

50) 杜甫「曲江二首」其一，『九家集注杜詩』卷一九。

51) 『後漢書』卷九三「李固伝」。

52) 『晋書』卷五五「夏侯湛伝」。

53) 『前漢書』卷三一「項羽伝」。

54) 『莊子』「宥帝王」，『莊子注』卷三。

貴百年於蟻穴中，破夢起坐，舍中炊黃粱猶未熟也。山谷之說如此。予按，齊民要術⁵⁵⁾載陶朱公養魚經曰，以六畝地為池，池中有九洲六谷，求鯉魚內池中云云。又按，吳越春秋⁵⁶⁾，范蠡曰，會稽之山有魚池，水中有三江四瀆之流，九溪六谷之広。山谷本引用此說，特以意加損爾。然詩意則謂千里訪道，如魚之回旋往復，徒自苦耳，不若歸而求之有余師。劉向新序⁵⁷⁾，丘吾子曰，吾有三失，少好學問，周遍天下，還後吾親亡，一失也。山谷蓋用此意。又按，異聞集⁵⁸⁾，道者呂翁，經邯鄲道上邸舍中。有少年盧生，自歎其貧困。言訖思寐。時主人方炊黃粱為饌，翁乃探懷中枕，以授生。枕兩端有竅。生夢中自竅入其家，見其身富貴五十年，老病而卒。欠伸而悟，顧呂翁在傍，主人炊黃粱尚未熟。山谷所引蟻穴夢，自是一事，亦見異聞集，當是記意不審耳。詩意則謂功名政復蓋世，豈若菽水奉親之樂耶。

⑤戰國策⁵⁹⁾，齊王孫賈之母謂賈曰，汝朝出而晚來，則吾倚門而望。暮出而不還，則吾倚廬而望。錢起詩⁶⁰⁾，曲終人不見。文選東暫補南陔詩⁶¹⁾曰，嗷嗷林鳥，受哺于子。李善注云，純黑而反哺者鳥也。老杜詩⁶²⁾，舟鷁排風影，林鳥反哺聲。

【通釈】

王稚川はすでに官を得たが，都に好ましく思う者がいてまだ家族のいる故郷へ帰らない。私は戯れに林夫人の「歎乃歌」二章を作り，王稚川に送った。「竹枝歌」は，もとは三巴で生まれ，湖湘に伝わった。「歎乃」は湖南の歌である。

花の咲きほこる頃，あの人は帰らなかった。夏になって棗が枝にたわわに実をつけた。年の瀬の雪が降るころ，馬の嘶きが聞こえただろうか。都では花びらが舞い散っているだろうか。

又

師に従い真理を学ぶは魚の千里をゆくが如く，世を覆う功を成しても黍の一炊のあいだ。来る日も来る日も門にもたれて待っているがあの人のは姿は見え，雛が親鳥に餌を与えるのを見るばかり。

①歎の音は襖，乃の音は藹に同じ。黄氏が山谷自筆の旧本を所有していて，詩題に「私は

55) 『齊民要術』卷六一。

56) 『吳越春秋』（『芸文類聚』卷九六，『太平御覽』卷九三五）。

57) 『新序』に見えない。『孔子家語』卷二に見える。

58) 『異聞集』（『太平広記』卷八二「呂翁」引）。

59) 『戦国策』卷一三。

60) 錢起「省試湘靈鼓瑟」，『錢仲文集』卷七。

61) 『文選註』卷一九，東暫「補亡詩六首」其一「南陔」。

62) 杜甫「奉送二十三舅録事之撰郴州」，『九家集注杜詩』卷三六。

また稚川の妻である林夫人に代わって稚川に詩を送った。当時稚川は都にいて、好ましく思う人がいて、ぐずぐずして故郷へ帰らなかったのである」とある。

②黄氏本は前章（二首の其一）を「花上盈盈人不帰，棗下纂纂実已垂。尋師訪道魚千里，蓋世功名黍一炊」の四句とする。案ずるに、『初学記』歌門に劉敬叔『異苑』を載せて、「臨川の聶包が死んで数年たったが、とつぜん南豊令の沈道襲のもとに現れ、歌いだした。その歌はとても面白くて何回もリフレインがあり、歌うたびに『花が盛りだ、しばし見に行くべし』と合いの手が入る。まさに人間界に帰ってきたわけだが、死んだのに生き返ったことについては、とうとう質問できなかった」とある。『文選』の潘岳「笙賦」の歌に「棗下 纂纂として、朱実離離たり。宛として其れ死なば、化して枯枝と為らん。人生れて行楽すること能わざれば、死して何をか虚謚を以て為さん」とあり、李善注に古代の「咄咄歌」を引いて「棗下 何ぞ攢攢たる、栄華 各々時有り。棗の初めて赤くならんと欲する時、人は四辺より来たる。棗は適に今日の賜、誰か能く之を仰ぎ視ん」という。什邡（今の四川省徳陽市）の張氏が山谷手書のこの詩を持っていて、今本と同じであるが、一・二字だけやや異なり、「実已垂」を「実已稀」に作る。また跋があり、「劉宋の時代に幽鬼となった女がいて、人の家に行つて『花上盈盈』の曲を歌つたが、悲壯で聴くに耐えなかった。潘岳の閑居賦の中に『棗下纂纂云々』という歌がある」と記しているが、引用にやや齟齬があり、おそらく記憶に拠つていて、大略を挙げたのであろう。

③張氏本は「聴嘶馬」に作る。老杜の詩に「一片の花飛ぶも春を減却するに、風 万点を飄して正に人を愁えしむ」とある。長安は、借りて汴京を言うのであろう。

④黄氏本は後章（二首の其二）を「臥氷泣竹慰母飢，天吳紫鳳補兒衣。臍雪在時聴嘶馬，長安城中花片飛」とする。この四句は以前作ったもので、後に改作したのであろう。今ここに旧作を附すのは、先輩（黄庭堅）の日々推敲の努力を知ってもらいたいからである。『後漢書』「李固伝」に「歩行して師を尋ね、千里を遠しとせず」とある。『晋書』「夏侯湛伝」に「古の人は、すなわち千里に師を尋ぬ」とある。『漢書』「項羽伝」に「力 山を抜き 氣 世を蓋う」とある。『莊子』に「功は天下を蓋えども、己に自らざるが似し」とある。張氏本に山谷の跋があり、「魚千里とは、陶朱公の養魚法のことである。およそ魚というものは、遠くまで泳いでいくことによって肥えるものであり、池の中で養殖したのでは瘦せる恐れがある。故に池の中に石を集めて九つの島を作り、魚がその周りをぐるぐる巡れば、日に千里の距離を行くこととなる。黍を炊くとは即ち、淳于棼が蟻の穴の中で百年の富貴を夢に見たが、夢から覚めて身を起こすと、現実には旅館で黍もまだ炊きあがらないほどの短い時間のことだった、という話である」という。山谷の説は以上のようなものである。予が案ずるに、『齊民要術』に陶朱公の「養魚経」を載せて、「六畝の土地を池とし、池の中には九洲と六谷があり、鯉を求めて池の中に放つ云々」とある。また案ずるに、『呉越春秋』に、范蠡曰く「会稽の山に魚の棲む池があり、水中には三江四瀆に匹

敵する流れがあり、九溪六谷の広さがある」とある。山谷は本来この説を引用したもので、意図をもって修正している。とするならば詩の意は、千里を厭わず道を求めたとしても、魚が池の中をぐるぐると巡って、いたずらに自らを苦しめているのと同じであり、故郷に帰って他の師を探したほうがよいというのである。劉向の『新序』に、丘吾子が「私は三つの過ちを犯しました。若くして学問を好み、天下を遍く渡りました。帰郷すると私の親はすでに亡くなっていました。これが一つ目の過ちです」と言った、とある。山谷はおそらくこの意を用いたのであろう。また案ずるに、『異聞集』に「道士の呂翁が邯鄲に向かう道中、宿に泊まった。盧生という若者がいて、身の困窮を嘆き、愚痴をこぼし終わると眠ろうとした。時に宿の主人は黍を炊いて食事の用意をしていた。呂翁はふところから枕をとりだし、盧生に与えた。枕の両端には穴があり、のぞきこむと盧生は夢の中でその家に入り、富貴の身となっており、五十年たって老いて病になり、死んだ。欠伸をして目を覚ますと、呂翁がそばにいて、宿の主人が炊いていた黍はまだ炊き上がっていなかった」とある。山谷が引いた「蟻穴の夢」はこれと同じで、同じく『異聞集』に見え、記憶が不確かだったのであろう。詩意は、功成り名を遂げて天下に響かせようとも、貧しくとも仲睦まじい暮らしの楽しみの及ばないこと。

⑤『戦国策』に、齊の王孫賈の母が賈に「お前が朝出かけて夕方帰ってくる時、私は我が家の門にもたれてお前の帰りを待ち望んでいる。お前が暮れに出かけてなかなか戻らないとき、私は村の門にもたれて帰りを待ち望んでいる」と言った、とある。錢起の詩に「曲終りて人見えず」とある。『文選』の束皙「補南陔詩」に「嗷嗷たる林鳥、哺を子に受く」とあり、李善注に「真っ黒で反哺するものを鳥という」とある。老杜の詩に「舟鷁風を排するの影、林鳥 哺を反するの声」とある。

「蓋世成功黍一炊」の句に対して、山谷跋は淳于棼の「蟻穴の夢」の話を書き、任淵は盧生の「枕中の夢」の話であると訂正している。どちらの話も『異聞集』にあり、「当に是れ記意審らかならざるのみ」という。いずれも夢の中で栄耀栄華を尽くすが現実世界では一瞬のことだったというストーリーだが、「黍一炊」の典故としては「枕中記」が正しい。

淳于棼の話は、『太平広記』巻四七五「昆虫類」三の「淳于棼」に、「出異聞録」として見える。唐・李公佐の作。別名「南柯太守」。盧生の話は、『太平広記』巻八二「異人類」二の「呂翁」に、「出異聞集」として見える。唐・沈既済の作。別名「枕中記」。『太平広記』は、原題ではなく話の冒頭にある言葉をタイトルに採用する方針で、もとの『異聞集』（晩唐・陳翰撰。『太平広記』「淳于棼」に「出異聞録」とするは誤り）は、任淵の頃までは利用できたようだが、後に散逸。

「淳于棼」の話は、0308「次韻子瞻贈王定国」の「百年炊未熟、一垓蟻追奔」の任淵注に見える。

「百年炊未熟」の任淵注に、

用異聞集邯鄲枕中夢事、見上蓋世成功黍一炊注。

『異聞集』の邯鄲の枕中夢の事、上の「蓋世成功黍一炊」注を見よ。

「一垤蟻追奔」の任淵注に、

異聞集載南柯太守淳于棼事云、棼疾、夢見二使者、扶生入宅南古槐穴中。前行数十里、有大城、門樓題曰大槐安国。其王以女瑶芳妻生、使為南柯郡守。在郡二十年、有檀蘿国来伐、王命生征之敗績。生妻病死。王謂生、可暫歸。生上車行、俄出一穴、見本里閭巷、入其門、見己身臥堂廡下、發悟如初。夢中倏忽若度一世矣。遂呼二客、尋古槐下穴。見大穴、洞然明朗、有積土壤、以為城郭台殿之狀。有蟻數斛、隱聚其中。中有小台、二大蟻處之、即槐安国都邑也。又窮一穴、直上南枝、亦有土城小樓、即南柯郡也。宅東一里、澗側有大檀樹、藤蘿擁織、傍有蟻穴、檀蘿之國、豈非此邪。山谷喜用此事、故具載之。

『異聞集』に南柯太守淳于棼の事を載せて云う、棼が病氣になり、夢で二人の使者が現れ、男を連れて邸宅の南の古い槐（えんじゅ）にある穴の中に入った。進むこと数十里、大きな街があり、城門の楼題には大槐安国と書かれていた。その国の王が娘の瑶芳を妻として嫁がせ、男を南柯郡守とした。郡に居ること二十年、檀蘿国に襲撃され、王は男に征伐を命じたが、軍は壊滅した。男の妻も病死した。王は男に、しばらく帰国するよう言った。男が車を進めていると、ふと穴がひとつ現れた。自分のふるさとの町並みだったので、その城門をくぐると、自分の身体は堂の軒下に寝そべっており、目を覚ますと最初と変わらぬようすだった。夢の中で、あっという間に一世を過ごしていたのだった。そこで二人の客を呼び、古い槐の木の下の方を探すと、大きな穴が、ぽっかりとあいていた。土が盛り上がっているところがあり、城台のようになっていた。蟻が数斛、その中にごそごそ集まっている。中に小さな楼台のような箇所があり、二匹の大きな蟻がそこにいた。これが槐安国の都だったらしい。また一つの穴をのぞくと、まっすぐ南の枝のほうへ延びていて、ここにも土の城と小楼があり、これが南柯郡であった。邸宅の東一里、谷側に大きな檀の樹があり、藤やつたが絡みついて、そばに蟻の穴があった。檀蘿の国は、これに違いない。山谷はこの事を用いるのを好んだので、ここにつぶさに載せる。

黄庭堅は「枕中記」の話と「南柯太守」の話を対にして、

百年炊未熟　百年　炊いで未だ熟せず

一垤蟻追奔　一垤　蟻　追奔す

と並べているので、二つの話を知って詩句に用いた。ここでは「百年」と「一垤」が対となり、「枕中記」では栄華を極めたようであり、黍すら炊けない一瞬の夢であったと、時間のはかなさを言い、「南柯太守」では大国の王の娘を妻とし、自身は太守となって敵国と戦いもしたが蟻の穴ひとつほどの世界での出来事だったと、空間のむなしさを言う。

0104「王稚川既……」其二では、

従師学道魚千里 師に従いて道を学ぶこと魚の千里

蓋世成功黍一炊 世を蓋って功を成すも黍の一炊

と、師に従って学問に励むこと「魚千里」のごとく、立身出世は「黍一炊」のごとし、が対になっていた。任淵注の解釈では、魚が千里を泳いでいるように見えてもそこは池の中、造られた島の周りをぐるぐる回っているだけであり、故郷に帰ってほかの師を探したほうがよい、丘吾子の過ち、すなわち天下をめぐる学問を修めても帰郷した時にはすでに親が亡くなっている後悔するはめになるから、ということであった。丘吾子は周の孝子、皋魚のこと。「皋魚之泣」は、周の皋魚が母を失って泣いた故事。「黍」に対して同じく食用となる「魚」であり、「魚千里」から「皋魚之泣」へとイメージがつながる。こうした言葉遊びの部分を持ちながら、「故郷を離れて」学問を究めようとする、官途に邁進することに、疑問を投げかける。

0117「留王郎」では、

百年才一炊 百年 才かに一炊

六籍経幾秦 六籍 幾秦をか経たる

が対になっていた。秦の始皇帝による焚書坑儒は有名だが、任淵注は王安石「桃源行」の「天下紛紛として幾秦かを経たる」を引き、熙寧年間に王安石が『周礼』『詩経』『書経』に対する注釈書『三経新義』を作り、学官に立てたことを言う。しかし、

要知胸中有 知るを要む 胸中の

不与迹同陳 迹と前に陳びざる有るを

郢人懐妙質 郢人 妙質を懐く

聊欲運吾斤 聊か吾が斤を運らさんと欲す

と続き、胸中の学問は古びることはない、「郢人」がいれば「匠石」も存分に腕をふるえるのだ、という。立身出世や栄耀栄華は儚いが、学問は永遠である。刻苦勉励すべし。黄庭堅が『莊子』の「匠石運斤」と「枕中記」（と「南柯太守」）を好んで詩句に用いた理由は、そこにあった。

「枕中記」を典故とする詩句は宋代以後に増えて、「一枕夢」「一枕黄粱」「夢邯鄲」「夢黄粱」「百年夢」などの詩語となった。「南柯太守」からも、「一枕南柯」「南柯一夢」「夢中槐蟻」などの詩語が生まれた。

三、『世説新語』から詩語へ

『世説新語』は、劉宋・劉義慶編、後漢末から東晋末にいたる名士の逸話集。『旧唐書』『経籍志』でも子部小説家類に分類されていた。人物に関心の高かった黄庭堅は、子部小説家類の書物の中でも、とくに『世説』を典故とする詩句が多い。ちなみに、原題は『世説』。劉向の

『世説』と区別するために『世説新語』と呼ばれるようになったが、任淵の注では『世説』が使われている。(以下、『世説新語』の解釈は、目加田誠『世説新語』、新釈漢文大系76・77・78、明治書院、1975～78年、に拠る)

『世説』は、任淵注に七十カ所を超えるが、典故が唐代以前の詩にも使われている例と、宋代になって詩に使われるようになった例がある。

0102 醇道得蛤蜊復索舜泉舜泉已酌尽官醞不堪不敢送

醇道 蛤蜊を得て復た舜泉を索む 舜泉は已に酌み尽す 官醞は堪えざれば敢えて送らず

- 1 青州従事難再得 青州の従事 再び得るは難し
- 2 牆底数樽猶未眠 牆底の数樽 猶お未だ眠らず
- 3 商略督郵風味悪 督郵は風味悪しきを商略すれば
- 4 不堪持到蛤蜊前① 持して蛤蜊の前に到るに堪えず

【任淵注】

①世説⁶³⁾、桓公有主簿善別酒，有酒輒令先嘗。好者謂青州従事，悪者謂平原督郵。注云、青州有齊郡，平原有鬲県。従事謂到齊下，督郵謂到鬲上住也。漢書李夫人伝⁶⁴⁾曰、佳人難再得。張籍詩⁶⁵⁾、酒尽臥空瓶。開元伝信記⁶⁶⁾曰、麴生風味，不可忘也。此反而用之。世説⁶⁷⁾、孫興公・許玄度共在白亭樓。商略先往名達。

【通釈】

醇道が蛤蜊（ハマグリ）を手に入れて、また舜泉（酒の名）がほしいと言ってきたが、舜泉はもう飲み尽くしてしまった。官酒はまずいので送らなかつた。青州従事（よい酒）はもう手に入らない。壁ぎわに数樽、まだ飲み終わらない酒がある。だが督郵（官酒）は風味がよくないことを考えると、蛤蜊の前に持って行くわけにはいきません。

63) 『世説新語』下巻「術解第二十」9。現行本は「青州有齊郡，平原有鬲県。従事謂到齊下，督郵謂到鬲上住也」を注ではなく、本文とする。

64) 『漢書』卷九七「李夫人伝」。

65) 張籍「贈姚合少府」、『張司業集』卷三。

66) 鄭綰『開元伝信記』。任淵注は「開元」としている。『開元伝信記』は唐の開元天宝年間の伝聞を集めた書。

67) 『世説新語』中巻「賞誉第八」119。現行本では「白亭樓」を「白樓亭」に作る。

①『世説』に「桓公（桓温）に酒の違いがよく分かる主簿がいて、酒があるとまず味見をさせた。よいものを青州従事といい、悪いものを平原督郵といた」とあり、注に「青州に齊郡があり、平原に鬲県がある。従事は齊（臍）の下までくるものをいい、督郵は隔（横隔膜）の上でとまるものをいう」という。『漢書』「李夫人伝」に、「佳人 再びは得難し」とある。張籍の詩に「酒尽きて空瓶を臥す」とある。『開天伝信記』に「麴生の風味、忘るべからず」とある。ここは反対の意味に用いた。『世説』に「孫興公と許玄度が一緒に白亭楼にいて、これまでの名士について議論した」とある。

「従事」と「督郵」は官名。酒を飲み尽くして空になった瓶を横倒しにすることを「酒樽が眠る」と表現した。「孫興公」は孫綽、「許玄度」は許詢のこと。「商略」は討論して品評すること。

「青州従事」は、酒の典故として、唐詩にも見える。例えば、皮日休「醉中寄魯望一壺並并一絶」詩に、「醉中不得親相倚，故遣青州従事来」とある。

対して「商略」は、宋代になってから詩に使われるようになった。例えば、北宋・蘇軾「寄曾節夫」詩に「須君細商略，晴日共茶甌」，南宋・姜夔「点絳唇」詞に「数峰清苦，商略黄昏雨」とある。

山谷詩では「商略」は、0626「次韻子瞻送顧子敦河北都運二首」其一にも「商略頗忘史」と使われており、任淵は『世説』の同じ記事を引用している。

黄庭堅がはじめて詩中に『世説』の語を使い、その後ほかの詩人も使うようになった例には、次のようなものがある。

0118「送王郎」，「酒澆胸次之磊隗」の「磊隗」。任淵注に、

世説⁶⁸⁾，王遜問王忱，阮籍何如司馬相如。忱曰，阮籍胸中磊隗，故須澆之。

王遜（王恭の誤り？）が王忱に尋ねた、「阮籍は司馬相如と比べてどうですか」と。

忱は言った、「阮籍は胸中に磊隗（わだかまり）がある，故に（酒で）これを洗い流したのだ」と。

0118「送王郎」，「炊沙作糜終不飽」の「炊沙作糜」。任淵注に、

世説⁶⁹⁾ 曰，賓客詣陳太丘，使元方・季方炊。二人聽客議論，忘著箒，皆成糜。

客が陳太丘（陳寔）を訪ねたので，（子の）元方（陳紀）・季方（陳諶）に飯を炊かせた。二人は客との議論を聴いて，（米を蒸す）箒を使うのを忘れ，みな粥になってしまった。

68) 『世説新語』下卷「任誕第二十三」51。

69) 『世説新語』中卷「夙惠第十二」1。

0401「奉和文潜贈無咎篇末多以見及以既見君子云胡不喜為韻」其七、「妙処端不朽」の「妙処」、任淵注に、

世説⁷⁰⁾、司馬太傅問謝車騎、惠子五車、何以無一言入玄。謝曰、当是妙処不伝。

司馬太傅（司馬道子）が謝車騎（謝玄）に問ねた。「惠子（惠施）は著書が車五台ほどもあったというのに、なぜ一言も奥深い境地に達したものがないのですか」と。謝は言った、「きっと妙処（玄妙なところ）が伝わらなかったのでしょうか」と。

0604「和答子瞻和子由常父憶館中故事」、人物殊秀整の「秀整」。任淵注に、

世説⁷¹⁾曰、李元礼風格秀整、高自標持。

李元礼（李膺）は風格が秀整（秀れて端正）で、高く自ら矜持している。

0711「題小雀捕飛虫画扇」、丹青妙処不可伝の「妙処」。任淵注に、

世説⁷²⁾、司馬太傅問謝車騎、惠子五車、何以無一言入玄。謝曰、当是妙処不伝。

（同 0401「奉和文潜贈無咎篇末多以見及以既見君子云胡不喜為韻」其七、「妙処端不朽」注）

1004「戲答張秘監饋羊」、煩公遣騎送寒家の「寒家」。任淵注に、

世説⁷³⁾、王経母曰、汝本寒家子。

王経の母が言った、「お前はもともと寒家（貧しい家）の出です」と。

1105「戲答晁深道乞消梅二首」其二、「南人誇説齒生津」の「南人」。任淵注に、

世説⁷⁴⁾曰、南人学問、如牖中見日。

南人（南方の人）の学問は、窓の中から日をうかがうようなものだ。

1105「戲答晁深道乞消梅二首」其二、「南人誇説齒生津」の「生津」。任淵注に、

世説⁷⁵⁾又載、魏武帝行失道、三軍皆渴、帝令曰、前有大梅林、饒子甘酸、可以解渴。士卒聞之、口皆水出。

魏の武帝（曹操）が行軍していた時に道が分からなくなり、三軍の兵はみな喉が渴いた。武帝は命じた、「前方に大きな梅林がある。実がたわわになって、甘酸っぱい。これで喉の渴きを癒やせるぞ」と。兵士たちはこれを聞くと、みな口の中に唾を生じた。

1308「答李任道謝分豆粥」、与公同味更同餐の「与公同味」。任淵注に、

70) 『世説新語』上巻「文学第四」58。

71) 『世説新語』上巻「德行第一」4。

72) 『世説新語』上巻「文学第四」58。

73) 『世説新語』下巻「賢媛第十九」10。

74) 『世説新語』上巻「文学第四」25。

75) 『世説新語』下巻「佞諂第二十七」2。

世説⁷⁶⁾、孫長樂作王長史詩云、同此玄味。

孫長樂（孫綽）は王長史（王濛）の詩を作り、「この玄味（深い味わい）をともしてきた」と言った。

1316 「廖致平送緑荔支為戎州第一王公権荔支緑酒亦為戎州第一」, 「誰能同此勝絶味」の「同此勝絶味」。任淵注に、

世説⁷⁷⁾、孫長樂作王長史詩云、余与夫人、交非勢利、心猶澄水、同此玄味。

孫長樂（孫綽）は王長史（王濛）の詩を作り、「私とあなたは、交わりは権勢利害を越え、心は澄んだ水のように、この玄味（深い味わい）をともしてきた」と言った。

1409 「和王観復洪駒父謁陳無己長句」, 「無屋正借舡官居」の「舡官」。任淵注に、

世説⁷⁸⁾、陶公作荊州時、勅舡官悉録鋸木屑。

陶公（陶侃）が荊州刺史だった時、舡官（船役人）に命じておがくずを集めさせた。

1411 「病起荊江亭即事十首」其九, 「張子耽酒語蹇吃」の「蹇吃」。任淵注に、

世説⁷⁹⁾、載頰責秦子羽云、此数子者、或蹇吃、無宮商、或尫陋、希言語。

頰が秦子羽を責めて言った、「この数人は、ある者は蹇吃（どもり）で、調子はずれ、ある者は背が曲がって、ろくに口がきけない」と。

1521 「贈李輔聖」, 「相看絶歎女博士」の「絶歎」。任淵注に、

世説⁸⁰⁾、殷中軍問劉尹云云、一時絶歎、以為名通。

殷中軍（殷浩）が劉尹（劉惔）に尋ねて……、当時の人々は絶歎（感嘆）し、みごとな解釈だと言った。

又⁸¹⁾云、袁虎作露布、手不輟筆、王東亭絶歎其才。

袁虎（袁宏）が布告の文を作ると、手にした筆を休めることもなく、王東亭（王珣）はその才能を絶歎（激賞）した。

1526 「謝答聞善二兄九絶句」其五, 「至今凜凜有生气」の「凜凜有生气」。任淵注に、

世説⁸²⁾、庾道季曰、廉頗・藺相如、雖千載、尚凜凜有生气。

庾道季（庾劭）は言った、「廉頗・藺相如は、千年も前の人だが、いまでも凜凜として生气がある」と。

1603 「再用前韻贈子勉四首」其一, 「只麼情親魚鳥」の「情親魚鳥」。任淵注に、

76) 『世説新語』下巻「輕詆第二十六」22。

77) 『世説新語』下巻「輕詆第二十六」22。

78) 『世説新語』上巻「政事第三」16。

79) 『世説新語』下巻「排調第二十五」7。

80) 『世説新語』上巻「文学第四」46。

81) 『世説新語』上巻「文学第四」96。

82) 『世説新語』中巻「品藻第九」68。

世説⁸³⁾、簡文帝在華林園、謂左右曰、会心処不必在遠、條然林木、便有濠濮間之趣、覺鳥獸禽魚、自來相親。

簡文帝（司馬昱）は華林園で、左右の者に言った、「心になかった場所は必ずしも遠くにはない。ほの暗い林に、濠水や濮水のほとりの趣きがあり、鳥や獸や魚が、知らぬ間にやってきて人に親しんでいる」と。

2005「浯溪図」,「下筆便造極」の「造極」。任淵注に、

世説⁸⁴⁾、仏経以為祛練神明、則聖人可致。簡文云、不知得登峰造極不。

仏典では、精神を磨きあげれば、聖人になれるという。簡文（司馬昱）が言った、「果たして高峰にのぼり造極（究極に至る）かどうかは分からない」と。

『世説』は短いエピソードを集めたもので、散文であり、会話も多い。その中から、「妙処」「造極」「超俗」のような、やや抽象的で哲学的な言葉も詩句に採り入れている。「妙処」などは、後人もよく使う詩語となった。

言葉そのものではないが、前後の話をふくめて「用其意（その意を用いる）」とされるケースもある。

0101「古詩二首上蘇子瞻」其一、「擲置官道傍」の「道傍」。任淵注に、

官道傍用世説⁸⁵⁾ 王充不趣道傍苦李意。

（「官道傍」は、『世説』の王充が道傍の苦李に関心を示さなかった意を用いている。）

0310「次韻答晁無咎見贈」,「保此已徹幸」の「保此」。任淵注に、

世説⁸⁶⁾、劉真長為丹陽尹、許玄度就劉宿。床帷新麗、飲食豐甘。許曰、若此保全、殊勝東山。劉曰、卿若知吉凶由人、吾安得保此。此詩兼采其意。

劉真長（劉惔）が丹陽の尹だった時、許玄度（許詢）が劉の家に泊まった。寝台は新しく綺麗で、食事も豊富でうまかった。許が言った、「もしこうした生活が全うできるなら、東山（会稽にある隱棲の地）よりはるかによい」と。劉が言った、「君がもし吉凶は人によると知っていたら、私にこうした生活を守れないことがあるだろうか」と。（この詩はこの意味を兼ねて採用している）

0311「次韻答張文潛惠寄」,「別去令人思」の「令人思」。任淵注に、

世説⁸⁷⁾、謝太傅云安北、見之、乃不使人厭、然出戸去、不復使人思。安北、王坦之也。

83) 『世説新語』上卷「言語第二」61。

84) 『世説新語』上卷「文学第四」44。

85) 『世説新語』中卷「雅量第六」4。

86) 『世説新語』上卷「言語第二」69。

87) 『世説新語』中卷「賞誉第八」128。

此反其意而用之。

謝太傅（謝安）が安北（王坦子）に言った、「会ってみると、人を厭きさせないが、部屋を出てしまうと、もう思い出せない」と。（安北は王坦之のこと。この詩では反対の意味に故事を用いている。）

0504「次韻子瞻武昌西山」,「意不及此文生哀」の「文生」。任淵注に,

世説⁸⁸⁾、孫楚除服、作詩示王武子、王曰、未知文於情生、情於文生、覽之悽然、增伉儷之重。此用其意、謂情於文生也。

孫楚が（妻の）喪があけて、詩を作って王武子（王濟）に示した。王は言った、「文から情がわくのか、情から文が生まれるのか分からないが、これを読むと悲しくなり、夫婦の情愛の重さが増す」と。（この詩はその意味を用いて、情が文から生じることをいう。）

0504「柳閣展如蘇子瞻甥也其才德甚美有意於学故以桃李不言下自成蹊八字作詩贈之」其二,「道傍多苦李」の任淵注に,

晋書王戎伝⁸⁹⁾、戎与群兒戲於道側、見李樹多實、等輩競趣、戎独不往、曰、樹在道辺而多子、必苦李也。世説⁹⁰⁾以道辺為道傍。

（『晋書』「王戎伝」に、王戎が子どもたちと道ばたで遊んでいて、李の樹に実がたくさんなっているのを見た。みなは争って採ったが、王戎だけは行かなかった。「樹が道辺にあって実がたくさんあるなら、きっと苦い李だ」と言った。『世説』では「道辺」を「道傍」としている。）

1409「和王観復洪駒父謁陳無己長句」,「佳人可思不可忘」の「可思」。任淵注に,

世説⁹¹⁾、謝太傅云、安北見之、乃不使人厭、然出戸去、不復使人思。此反而用之。

（同 0311「次韻答張文潛惠寄」,「別去令人思」注）

いずれも『世説』の故事を知らないと、ごく一般的な言葉として読み過ごしてしまいそうなものである。

また、『世説』に典故は求められるが、文字を「借用」して、いわゆる「換骨奪胎」しているケースがある。

0101「古詩二首上蘇子瞻」其二,「小草有遠志」の「小草」「遠志」。任淵注に,

88) 『世説新語』上卷「文学第四」72。

89) 『晋書』卷四三「王戎伝」。

90) 『世説新語』中卷「雅量第六」4。

91) 『世説新語』中卷「賞誉第八」128。

世説⁹²⁾、桓温問謝安、遠志又名小草、何以一物而有二名。郝隆曰、処則為遠志、出則為小草。此特借用、以指菟糸、言其不依附凡木、所志遠矣。

桓温が謝安に尋ねた、「遠志は別名小草というが、同じ物になぜ二つ名前があるのだろうか」と。郝隆が言った、「うちにある時は遠志といい、世に出れば小草というのです」と。(ここは借用しているだけで「菟糸」を指し、それが平凡な樹に依っているのではなく志が遠大であることを言う。)

0401「奉和文潜贈無咎篇末多以見及以既見君子云胡不喜為韻」其七、「諸生用其短」の「用其短」。任淵注に、

世説⁹³⁾曰、周弘叔巧於用短、杜方叔拙於用長。此借用其字。

周弘叔(周恢。字は弘武)は短所を用いるのが上手く、杜方叔は長所を用いるのが下手である。(ここはその文字を借用した。)

0819「再答景叔」,「三珍同盤乃得嘗」の「同盤」。任淵注に、

世説⁹⁴⁾、桓公曰、同槃時尚不相助、况復危難。此借用其字。

桓公が言った、「同槃(同じ皿)しても助け合おうとしないこともある。まして危難の折にはなおさら」と。(ここはその文字を借用した。)

1110「贈秦少儀」,「三日臥向壁」の「臥向壁」。任淵注に、

世説⁹⁵⁾、王東亭軼臥向壁、歎曰、人固不可以無年。此借用、自恨知少儀之晚、向壁愧歎也。

王東亭(王珣)が寝返りをうって壁に向かい、嘆いて言った、「人はまことに短命であってはならぬものだ」と。(ここは借用し、秦少儀を知るのが遅かったことと残念に思い、壁に向かって恥じ、嘆いている。)

2015「以椰子茶瓶寄德孺二首」其二、「今在籬落間」の「籬落間」。任淵注に、

世説⁹⁶⁾、桓玄就桓崖求桃、不得佳者。玄与殷仲文書曰、德之休明、則肅慎氏貢其楛矢、如其不爾、籬壁間物亦不可得。此借用。

桓玄が桓崖(桓脩)に桃を求めると、よいものをくれなかった。玄は殷仲文に手紙を書き、「徳が立派であれば、遠くの肅慎もその楛矢を献上したが、もしそうでない時は、籬壁(まがきと壁)の間の物でさえ、得ることはできないものだ」といった。(ここは借用している。)

92) 『世説新語』下巻「排調第二十五」32。

93) 『世説新語』中巻「品藻第九」8。

94) 『世説新語』下巻「黜免第二十八」4。

95) 『世説新語』中巻「品藻第九」83。

96) 『世説新語』下巻「排調第二十五」65。

『世説』には、劉孝標（462～521）の注があり、引用されている文献は四百余种、詩賦散文は七十余首、いまでは佚書・佚文であるものも多い。0102「醇道得蛤蚶復索舜泉舜泉已酌尽官醞不堪不敢送」の任淵注にも、「世説注」からの引用があった。

任淵が『世説』の劉孝標注から引用したものは、以下のとおり。

0214「題王仲弓兄弟巽亭」, 「烏衣之雲孫」の「烏衣」。任淵注に,

世説⁹⁷⁾, 王導曰, 元規若来, 吾角巾還烏衣。注引丹陽記曰, 烏衣之起, 吳時烏衣營処所也。江左初立, 琅琊諸王所住。

王導が言った、「元規（庾亮）がもし攻めてきたら、私は角巾をかぶって、烏衣巷へ帰ろう」と。注に『丹陽記』を引いて、「烏衣の由来は、三国呉の時代に烏衣營がここに置かれたことによる。江南に（東晋の政權が）立てられた時、琅琊の王氏がここに住んだ」とある。

0311「次韻答張文潛惠寄」, 「短褐不磷緇」の「不磷緇」, 任淵注に,

世説注⁹⁸⁾, 蔡洪与周俊書曰, 張暢居磨涅之中, 無緇磷之損。

蔡洪が周俊に与えた手紙に、「張暢は濁乱の中にあっても、緇磷（くすみ薄らぐ）ということはない」とある。

0401「奉和文潛贈無咎篇末多以見及以既見君子云胡不喜為韻」其八, 「射雉用一矢」の「射雉」, 任淵注に,

世説注⁹⁹⁾ 引虞預晋書, 陸機薦戴淵於趙王倫曰, 蓋聞繁弱登御, 然後高墉之功顯, 孤竹在肆, 然後降神之樂成。

虞預『晋書』に、「陸機は戴淵を趙王倫に推薦して言った、『繁弱の弓は公に用いられて、はじめて高墉の雉を射る功績を顕し、一本の竹も並べられて（笙となって）、はじめて降神の曲を奏でると聞いています』と。

0504「柳閔展如蘇子瞻甥也其才德甚美有意於学故以桃李不言下自成蹊八字作詩贈之」其五, 「風味窺大雅」の「風味」, 任淵注に,

又世説注¹⁰⁰⁾, 高逸沙門伝曰, 支遁居会稽, 晋哀帝欽其風味。

『高逸沙門伝』に、「支遁は会稽に住んでいて、晋の哀帝はその風味（風格）を愛した」とある。

97) 『世説新語』中巻「雅量第六」13。

98) 『世説新語』中巻「賞誉第八」20, 「張威伯歲寒之茂松, 幽夜之逸光」注。『蔡洪集』に「与刺史周俊書」を載せ, 「張暢字威伯, 吳郡人。稟性堅明, 志行清朗, 居磨涅之中, 無緇磷之損。歲寒之松柏, 幽夜之逸光也」とある。

99) 『世説新語』下巻「自新第十五」2, 「機弥重之, 定交, 作筆薦焉」注。「之」は戴淵のこと。

100) 『世説新語』上巻「文学第四」42, 「支道林初從東出, 住東安寺中」注。

0923「題子瞻枯木」,「胸中元自有丘壑,故作老木蟠風霜」の任淵注に,

世説注¹⁰¹⁾ 引支氏趙遙論曰,至人乘天正而高興,遊無窮於放浪。

支氏『趙遙論』に「至人は天の正気に乗って高く上がり,無窮の世界に遊んで放浪する」とある。

0925「詠伯時画太初所獲大宛虎脊天馬図」,「超俗駕長風」の「超俗」,任淵注に,

世説注¹⁰²⁾,魏氏春秋曰,時謂王戎未能超俗也。

『魏氏春秋』に、「当時,王戎はまだ超俗(世俗を超越する)できていなかった」とある。

1227「再用前韻詠子舟所作竹」,「小紙弄姿態」の「姿態」,任淵注に,

世説注¹⁰³⁾,文士伝曰,張華為人少威儀,多姿態。

『文士伝』に「張華は威儀少なく,姿態(格好)つけた男だ」とある。

1304「次韻黃斌老晚游池亭二首」其二,「且作人間鵬鷗遊」の「鵬鷗遊」,任淵注に,

世説注¹⁰⁴⁾,向子期・郭子玄逍遙義曰,夫大鵬之上九万,尺鷗之起枋榆,小大雖殊,各任其性,苟当其分,逍遙一也。

向子期・郭子玄「逍遙義」に、「そもそも大鵬は天に舞い上がること九万里,尺鷗は奮いたっても枋(まゆみ)や榆の高さ,大小に違いはあるが,それぞれその性に任せている。もしその本分にならば,逍遙に変わりはない」とある。

1315「次韻任道食荔枝有感三首」其一,「万事称好司馬公」の「称好司馬公」。任淵注に,

世説¹⁰⁵⁾ 載司馬徽別伝曰,徽字德操,括囊畏慎人。有以人物問徽者,初不弁其高下,每輒言佳。其婦諫之,徽曰,如君所言,亦復佳。

『司馬徽別伝』に、「徽,字は德操,口をつぐんで慎み深い人だった。人物のことを徽に尋ねる人がいると,初めからその高下を批評することはなく,いつも結構ですと言っていた。その妻が諫めると,徽は『お前のその言葉も,また結構だよ』と言った」とある。

1403「次韻楊明叔見餞十首」其六,「蹇淺不能超」の「不能超」,任淵注に,

101) 『世説新語』上巻「文学第四」32,「(莊子逍遙篇)支卓然標新理於二家之表,立異義於衆賢之外,皆是諸名賢尋味之所不得。後遂用支理」注。

102) 『世説新語』下巻「排調第二十五」4,「嵇阮山劉,在竹林酣飲。王戎後往。歩兵曰,俗物已復來敗人意」注。

103) 『世説新語』下巻「排調第二十五」7,「頭責秦子羽云,子曾不如…范陽張華,…此数子者,…或淹伊多姿態」注。

104) 『世説新語』上巻「文学第四」32,「莊子逍遙篇,旧是難處,諸名賢所可鑽味而不能拔理于郭向之外」注。

105) 『世説新語』上巻「言語第二」9,「南郡龐士元,聞司馬德操在潁川,故二千里候之。……德操曰」注。

世説注¹⁰⁶⁾ 曰，時謂王戎未能超俗也。

(同 0925 「詠伯時画太初所獲大宛虎脊天馬図」，「超俗駕長風」注)

1716 「次韻文潛」，「扞拭宝墨生楚槍」の「楚槍」，任淵注に，

世説注¹⁰⁷⁾，婦人集載阮氏与許允書，辞甚酸楚。

『婦人集』に阮氏が許允に与えた手紙があり，その言葉はとても悲痛だった。

1806 「鄂州南楼書事四首」其四，「武昌參佐幕中画」の「參佐」，任淵注に，

世説注¹⁰⁸⁾，劉弘謂陶侃曰，昔吾為羊太傅參佐。

劉弘が陶侃に言った，「むかし私は羊太傅（羊祜）の參佐だった」と。

このうち 0923 「題子瞻枯木」は少し特殊な例で，「胸中元自有丘壑，故作老木蟠風霜」の任淵注に「此兩句，元作筆端放浪有江海，臨深枯木飽風霜（この二句は，もとは『筆端放浪有江海，臨深枯木飽風霜』であった）」とあり，改訂前の詩句にある「放浪」についての注である。

ほかに，1015 「憶邢惇夫」の「何況人間父子情」の任淵注に，「世説注，王愆期謂陶侃曰，賢子越騎酷没，天下為公痛心，況慈父情耶」とあるが，佚文か。この文は，宋・祝穆『古今事文類聚前集』卷五十四に『世説』として見える。

任淵の時代すでに佚文で，任淵が類書から「世説」を引用している例がある。

0408 「送顧子敦赴河東三首」其三，「虎頭墨妙能頻寄」の「虎頭」。任淵注にいう，

按歐陽詢芸文類聚引世説，顧愷之為虎頭將軍。然今世説不載，而歷代名画記云，愷之小字虎頭。未知孰是。

案ずるに，歐陽詢『芸文類聚』に『世説』を引いて，顧愷之が虎頭將軍となった，という。だがいまの『世説』にこの記事はなく，『歷代名画記』に「愷之，小字は虎頭」とあるが，正しいかどうかは不明。

四、張舜民小説

以前，任淵注に引用されている文献・書物を調べた時，「判明しなかった書物が，二十点ほどある」¹⁰⁹⁾とペンディングにしていた中に，「張舜民小説」があった。任淵注には「張舜民南

106) 『世説新語』下巻「排調第二十五」4，「嵇阮山劉，在竹林酣飲。王戎後往。步兵曰，俗物已復來敗人意」注。

107) 『世説新語』下巻「賢媛第十九」8，「許允為晋景王所誅，門生走入告其婦。婦正在機中，神色不變，曰，蚤知爾耳」注。

108) 『世説新語』上巻「言語第二」47，「陶公疾篤，都無獻替之言，朝士以為恨」注。

109) 拙論「『山谷詩集注』を読むために (3)」，慶應義塾大学日吉紀要『言語・文化・コミュニケーション』50号，2018年，81～109頁。引用は，97頁。

遷録」も数カ所に見えるが、これも不明としていた。

今回、改めて調べ直すと、張舜民は北宋の人、『画墁録』一卷、『南遷録』一卷、ともに『宋史』「芸文志」子部小説類に記録されている。

張舜民（生卒年不詳）、字は芸叟、号は浮休居士、碇齋。邠州（今の陝西省彬県）の人。陳師道の姉の夫。英宗の治平二年（1065）の進士、襄楽令となり、龍図閣待制、知定州を歴任、元祐党籍に連座して商州に謫される。のち集賢殿修撰に復職して、卒す。『宋史』卷三四七に本伝あり。

「張舜民小説」は、張舜民『画墁録』のこと。任淵注では、二カ所に見える。

0203「神宗皇帝挽詞三首」其三、「河洛功無憾，幽燕策未收」の任淵注に、「張舜民小説云、神廟於崇政殿後設二十四庫，以儲金帛，諸路分將置都作院，河北設五都倉，講好高麗。然功未施而上賓，是天未欲幽薊之民歸中国乎」とある。

0205「謝送礮壑源揀牙」，「喬雲從龍小蒼壁，元豊至今人未識」の任淵注に、「按張舜民小説云，熙寧末，神廟有旨，下建州，製密雲竜，其品又高於小团」とある。

『南遷録』は、任淵注の五カ所に見える。地理的な解説が多い。

0720「奉同子瞻韻寄定国」，「海門天水寬」の「海門」，任淵注に「張舜民南遷録云，潤州甘露寺，東眺海門，北見揚州」とある。

1715「武昌松風閣」，「曉見寒溪有炊煙」の「寒溪」，任淵注に「張舜民南遷録曰，寒溪即元次山故居」とある。

1917「次韻陳榮緒同倚鍾樓晚望別後明日見寄之作」，「天外僧伽塔，斜暉極照臨」の任淵注に、「張舜民南遷録曰，洞庭湖中有扁山，上有小塔，望之巋然，曰啞女塔。昔有士人，女生数歳，不能言，一日涉湖，見塔輒語。其父母書曰，若日月之照臨，「青草無風浪，枯松半死心」の任淵注に、「張舜民南遷録曰，洞庭湖西岸有沙州，堆阜隆起，即青草廟下一湖之内，中有此洲。南名青草，北名洞庭，所謂重湖也。又曰，岳陽樓有碑，極大，乃前知州李觀所紀呂洞賓事迹。言呂憩於岳州白鶴寺前松下，有老人自松梢冉冉而下，致恭於呂。問之，為何。乃曰，某松之精也，見先生過，礼当候見。呂因書二絶句於寺門壁間。其一云，独自行兮独自坐，無限世人不識我。惟有城南老樹精，分明知道神仙過。郡人於松下創亭，名曰呂仙」とある。

1923「離福巖」，詩題の任淵注に「張舜民南遷録云，旧名般若寺。陳泰建中思公道場，唐懷公磨磚之地」とある。

1924「花光仲仁出秦蘇詩卷思両国士不可復見開卷絶歎因花光為我作梅数枝及画煙外遠山追少游韻記卷末」，「長眠橘洲風雨寒」の「橘洲」，任淵注に「張舜民南遷録記潭州事云，橘

洲在湘江中，南北与州城等」とある。

陸游（1125～1210）の『入蜀記』巻二，八月五日に「張芸叟南遷録云，庾亮鎮潯陽，經始此樓。其誤尤甚」とあり，この頃まで『南遷録』は読まれていたが，のちに散逸。『四庫全書総目』史部雜史類に存目（浙江范懋柱家天一閣蔵本）されている『南遷録』は，提要に「旧題金通直郎秘書省著作郎騎都尉張師顔撰」とあり，金朝の張師顔撰。『宋史』「芸文志」伝記類にも「張師顔金人南遷録一卷」があり，清・曹溶『学海類編』に『南遷録』が収録されているが，任淵注にある記事は見えない。別本か。

任淵注では張舜民について，1404「次韻石七三六言七首」其五，「且喜龔鄒冠豸，又聞張董上坡」の注に，「按実録，（元符三年）……四月，張舜民為右諫議大夫，……舜民字耘叟」とある。

また，0813「次韻游景叔聞洮河捷報寄諸將四首」の詩題注に「張舜民作种誼墓志云……」，其四「遙知一炬絶河津，生縛青宜不動塵」の注に「張舜氏作游師雄墓誌云……」と張舜民の書いた墓誌銘を引く。种誼（生卒年不詳），字は寿翁，名将种世衡の第八子。「游師雄墓誌」は現在も残っており，西安碑林博物館第五室に展示されている。

五、詩句を採る

小説類の書物の中に引用されている詩句が，任淵注に引用されていることがある。これは典故というよりは，用例になるであろう。『太平広記』にも載せる鬼詩「城市多囂塵，還山弄明月」の例はすでに見たが，ほかに次のような例がある。書物ごとに挙げると，

『朝野僉載』

0502「次韻子瞻武昌西山」の「山川悠遠莫浪許」，任淵注に「朝野僉載，唐咸亨中謠曰，莫浪語，阿婆曠」とある。

1526「謝答聞善二兄九絶句」其七の「椎床破面根觸人」，任淵注に「朝野僉載，楊廷玉回波詞曰，阿姑婆見作天子，旁人不得根觸」とある。

『明皇雜録』

0101「古詩二首上蘇子瞻」其二の「氣味固相似」，任淵注に「明皇雜録，高力士詠齊詩曰，夷夏雖有殊，氣味終不改」とある。

『雲溪友議』

0621「次韻文潛同遊王舍人園」の「重游樊素病」，任淵注に「雲溪友議云，白居易妓，樊素善歌，小蠻善舞。為詩曰，櫻桃樊素口，楊柳小蠻腰」とある。

0705「子瞻去歲春侍立邇英子由秋冬間相繼入侍作詩各述所懷予亦次韻四首」其四の「只欠

小蠻樊素在」，任淵注に「雲溪友議載樂天詩曰，櫻桃樊素口，揚柳小蠻腰」とある。

1414「次前韻謝与迪惠所作竹五幅」の「取笑如東施」，任淵注に「雲溪友議，朱拱嘲郭素詩曰，借問東鄰效西子，何如郭素擬王軒」とある。

『唐摭言』

0113「演雅」の「黃口只知貪飯顆」，任淵注に「摭言，李白詩，飯顆山頭逢杜甫」とある。

1104「同元明過洪福寺戲題」の「旧題塵壁似昏鴉」，任淵注に「摭言，王播詩曰，三十年前塵撲面，如今始得碧紗籠」とある。

1702「湖口人李正臣蕃異石九峰東坡先生名曰壺中九華并為作詩後八年自海外歸湖口石已為好事者所取乃和前篇以為笑寔建中靖国元年四月十六日明年当崇寧之元五月二十日庭堅繫舟湖口李正臣持此詩來石既不可復見東坡亦下世矣感歎不足因次前韻」の「頓覺浮嵐暖翠空」，任淵注に「摭言載趙嘏詩云，何必青樓倚翠空」とある。

1222「次韻雨糸雲鶴二首」其二の「夜寒應上九天栖」，任淵注に「唐摭言，楊衡詩，一一鶴声飛上天」とある。

『啓顔録』

0207「和答外舅孫莘老」の「觴豆愆調護」，任淵注に「啓顔録，程季明有嘲熱客詩曰，今代愚癡子，觸熱到人家」とある。

『北夢瑣言』

0119「次韻劉景文登鄴王台見思五首」其五の「寒機泣到明」，任淵注に「北夢瑣言，徐月英送人詩云，枕前淚与階前雨，隔箇閑窓滴到明」とある。

1411「病起蒨江亭即事十首」其一の「時有婦牛浮鼻過」，任淵注に「北夢瑣言，陳詠詩曰，隔岸水牛浮鼻渡，傍溪沙鳥點頭行」とある。

『談苑』【散逸】

0113「演雅」の「醯鷄瓮裏天幾大」，任淵注に「談苑，劉師道詩，醯鷄舞甕天」とある。

0616「陳留市隱并序」の「乘肩嬌小女」，任淵注に「談苑曰，江南掘得石記，有詩云，東鄰嬌小女，騎虎踏河冰」とある。

0821「寄上叔父夷仲三首」其一の「夢魂和月繞秦隴」，任淵注に「揚文公談苑載菩薩蠻詞，有月和殘夢園之句」とある。

『青箱雜記』

0313「次韻曾子開舍人游籍田載荷花婦」の「紅粧倚荷蓋」，任淵注に「青箱雜記，曹修己詩，荷葉罩芙蓉，円青映嫩紅。佳人南陌上，翠蓋立春風」とある。

0812「王聖美三子補中廣文生」の「舍中犢子賸狂顛」，任淵注に「青箱雜記，張師錫老兒詩曰，長思当弱冠，悔不賸狂顛」とある。

1303「又答斌老病愈遣悶二首」其一の「紅荷倚翠蓋」，任淵注に「青箱雜記，曹脩古詩云，荷葉罩芙蓉，円青映嫩綠。佳人南陌上，翠蓋立春風」とある。

1311「次韻奉答文少激紀贈二首」其一の「今日相看清眼旧」，任淵注に「青箱雜記，范諷詩，惟有南山与君眼，相逢不改旧時青」とある。

『劇談録』

0113「演雅」の「鸚鵡纔言便關鎖」，任淵注に「劇談録，白居易玉蘂花詩曰，不縁啼鳥春饒舌，青瑣仙郎何得知」とある。

裴鉞『伝奇』

1412「鄒松滋寄苦竹泉橙麴蓮子湯三首」其三の「剥尽紅衣搗玉霜」，任淵注に「裴鉞伝奇載樊夫人詩曰，一飲瓊漿百感生，玄霜杵尽見雲英」とある。

『唐宋遺史』【散逸】

1203「和答元明黔南贈別」の「驚風鴻雁不成行」，任淵注に「唐宋遺史有女子作詩送兄云，所嗟人異雁，不作一行歸」とある。

『談藪』

0716「題劉將軍鵝」の「籀文時印平沙」，任淵注に「談藪，吳均詩，雁足印黃沙」とある。

おわりに

以上，英語の novel とは異なる中国古典の「小説」について，黄庭堅がどのような文献・書物からどのような詩句をつむいだのか，見てきた。

晩唐の李商隱は，妖艶で唯美的な詩風を高く評価され，多くの追隨者を生み，北宋初期に一大流行を見る西崑体の祖となった。彼は杜甫を師と仰ぎ，詩作する際には参考にするため，数々の書物を机の上に並べて置いた。それはまるで，川瀬（カワウソ）が捕らえた魚を並べる習性（瀬祭魚）のようだった，と言われる。李商隱は稗史や小説など，知識人階級が手を触れるべきでないと言われた雑書の類からも，典故を用いた。いわゆる「僻典」である。

北宋初期の追隨者は李商隱の耽美的な詩風を模倣しようとしたが，北宋中期の欧陽脩より下の世代である黄庭堅は，物語的な展開を見せる今日の小説に近い唐代伝奇ばかりではなく，『世説』のようなエピソード集，しかもその注に引用される稗史からも，積極的に語句を採用して，詩を作っていたようすが分かった。黄庭堅が初めて詩に用いた言葉には，「妙処」「造極」「超俗」のような，あまり「詩的」ではない言葉も多く，宋詩が理知的と評される所以の一つと言えるかも知れない。

『太平広記』の利用をめぐって，北宋の文人として生きた黄庭堅と，北宋末に黄庭堅の弟子となり，南宋になって山谷詩の注本を刊行できた任淵の読書環境の違いも垣間見えた。北宋の時代には，『太平広記』を含む大規模な出版事業が行われ，黄庭堅は中央にいた頃は宮中書庫を使える立場にあり，文人仲間と集まっては詩を作り，それを書し，さらに小さな詩集としてまとめる活動にも，参加していた。その文人グループの範疇にいたと思われる張舜民（黄庭堅

の弟子、陳師道の姉の夫)も「小説」を残しており、任淵はそれも利用して、山谷詩に注をつけた。任淵は、黄庭堅の息づかいを感じつつ(感じようと努力しつつ)、膨大な文献・書物から、師が読んでいたであろう言葉を探し続け、師の詩境に迫ろうとした。

最後に、黄庭堅が詩句に使ってから、後世の詩人に多く使われるようになった「妙処」を含む作品を、読んでみたい。当時の「小説」が「街談巷語、道聽途説(町のうわさ話や道ばたで語られたもの)」であり、それを事細かに掬いあげている彼らが、何を見ようとしていたのか、どのような境地を追い求めていたのか、感じるために。

0711 題小雀捕飛虫画扇

小雀の飛虫を捕うる画扇に題す

- | | |
|------------|-------------------|
| 1 小虫心在一啄間 | 小虫 心は一啄の間に在り |
| 2 得失与世同轻重① | 得失 世と軽重を同じうす |
| 3 丹青妙処不可伝 | 丹青の妙処 伝うべからず |
| 4 輪扁斲輪如此用② | 輪扁 輪を斲ること 此くの如く用う |

【任淵注】

① 莊子¹¹⁰⁾ 曰、沢雉十歩一啄、百歩一飲。

② 世説¹¹¹⁾、司馬太伝問謝車騎、恵子五車、何以無一言入玄。謝曰、当是妙処不伝。莊子¹¹²⁾ 曰、相公讀書於堂上、輪扁斲輪於堂下。曰、以臣之事觀之、斲輪、徐則甘而不固、疾則苦而不入、不徐不疾、得之於手而応於心、口不能言、有数存焉於其間。古之人与其不可伝也死矣。然則君之所読者、古人之糟粕已。

【通釈】

小さな雀が飛んでいる虫を捕らえる画の扇に書す

小さな虫が、わずかな餌として狙われている。雀は虫をうまく捕らえられるかどうか、これは天下の一大事と同じ重さだ。この丹青(絵画)の妙処は、なかなか伝わらないだろう。車輪職人の扁が、軸穴を削ったのと同じようなものだ。

① 『莊子』に、「沢の雉は十歩あゆんで一啄(わずかな餌)にありつき、百歩あゆんでわずかな水を飲む」とある。

110) 『莊子』「養生主」、『莊子注』巻二。

111) 『世説新語』上巻「文学第四」58。

112) 『莊子』「天道」、『莊子注』巻五。

②『世説』に、「司馬太傅（司馬道子）が謝車騎（謝玄）に問ねた。『恵子（恵施）は著書が車五台ほどもあったというのに、なぜ一言も奥深い境地に達したものがないのですか』と。謝は『きつと妙処（玄妙なところ）が伝わらなかったのでしょう』と言った」とある。『莊子』に、「（斉の）相公が堂の上で書を読み、車輪を造る扁という職人が堂の下で削っていた。（扁が）『わたくしが見ますに、車輪を削るとき、軸穴がゆるいとしまりが悪くなり、軸穴がきついと窮屈ではまりません。ゆるくもなくきつくもない、その加減は手が覚えて心が納得するもので、口ではうまく説明できませんが、極意が確かにあります。いにしえの人も、そうした妙処とともに亡くなりました。そうであるならば、陛下が読んでいるのは、いにしえの人の残りかすなのではありませんか』と言った」とある。

『莊子』の「沢雉十歩一啄，百歩一飲」は、「不蕪畜乎樊中，神雖王不善也（それでも籠の中で養われることを求めない，気力は盛んになるだろうが楽しくないからだ）」と続く。

学問は永遠であるが，立身出世や栄耀栄華のために読書するのであれば，それは聖人の残りかすをたどっているにすぎず，人生は黍一炊の夢に終わるであろう。しかしそうした「妙処」は，なかなか伝わらないものである。